



「見たり、聞いたり、探ったり」No.286

通算 No.437

青木行雄

「久能山と家康公」(静岡県)

「徳川家康」・波瀾万丈の生き様を探る。

日本の名地にはお城の天守があって町のシンボリック役割をはたしている。天守閣のない城跡には再建の話が持ち上がり、再建された所も何城かある。江戸、東京にはどうして再建出来ないのか単純な思いから、この「江戸城天守を再建する会」に入会して、約20年近くなる。途中で認定NPO法人にも認定され活動を続けている。日本橋界隈の景観を著しく損なわれていた高速道路を地下に通す計画が実現し工事が始まった。この計画は日本橋界隈に住む人々や企業の団体などのたゆまぬ努力と請願署名運動で実現したとの話から、この「江戸城天守を再建する会」も、請願署名運動に力を入れることになり今、頑張っている。

そして今回會員の懇親を深めるため、お城に関係ある「駿府城」「久能山東照宮」「静岡浅間神社」等、令和5年12月9日家康に関するバスツアーで探索して来た。

まず東京八重洲口をバスで出てから直行で3時間30分静岡県の日本平に到着した。晴天の日本平は正面の「富士山」が最高の景観だった。そこで先に「日本平」をちょっと説明すると

日本平はその昔、日本武尊が東征の際、草薙くさなぎの原で野火の難にあった、そして賊を平定した後、この山の頂上に登り、四方を眺めたところから、この名が「日本平」と呼ばれるようになったといわれている。現在の日本平は日本観光地100選、国の名勝地、県立自然公園に指定され、標高307メートルの丘陵地である、「日本平観光ホテル」もあった。

平成25年6月に世界文化遺産に登録された「富士山」を正面に、眼下にはその構成資産となった「三保松原」や駿河湾のすばらしい風景がひろがっており、この景観も見ることが出来た。



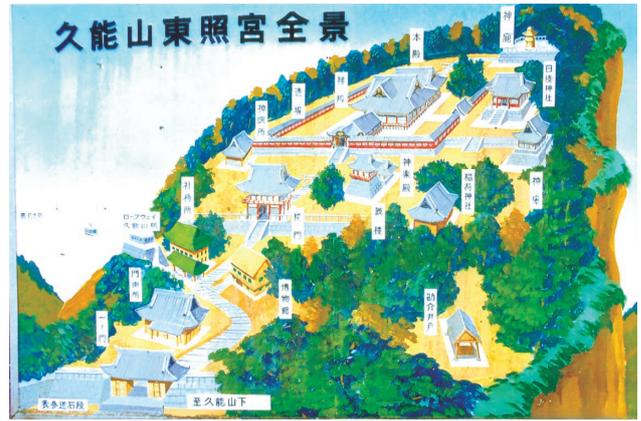
日本平から東照宮へ向うロープウェイ正面に「葵の紋」がついている。



ロープウェイ東照宮駅、到着の様子



日本平の広場、パカでかい、電波塔



久能山東照宮全図、途中に駅がある

この日本平駅からロープウェイに乗り、久能山駅まで約5分、普通ロープウェイに乗ると言えば行きは登るのが普通だがこのロープウェイは下りになり、久能山「東照宮」は日本平より低い。しかし、久能山の下から東照宮にお参りするには、1159段もの階段を登ることになるので、健脚の人には階段を登りながら、駿河湾を望み、ゆっくりと歩きながら、さまざまな鳥の鳴き声を聞くことも出来ると言うからステキな登山コースかも知れない。

ロープウェイの久能山駅はこの「東照宮」の入り口で駅から数十段登ると「蘇った東照宮」国宝豪華絢爛な社殿が目の前に出現する。

2010年(平成22)12月、国宝指定を受けたこの権現造りの社殿、日本が誇る建築家中井大和守正清(1565～1619)によって、徳川家康公を祀るにふさわしい建物13棟が1617年(元和3年)11月には完成した。そして平成の大修理で約7年もの長い年月をかけて色あざやかに400年前の輝きを取り戻し、見ごとに蘇った社殿を見ることが出来た。

「日光東照宮」もちろんすばらしいが本家本元はこの「久能山東照宮」で徳川家康公本人はここ久能山にて「土葬」で眠っている。

この家康公の「神廟」は最近人気スポットとなり拜むとご利益パワーが生まれるようだ。

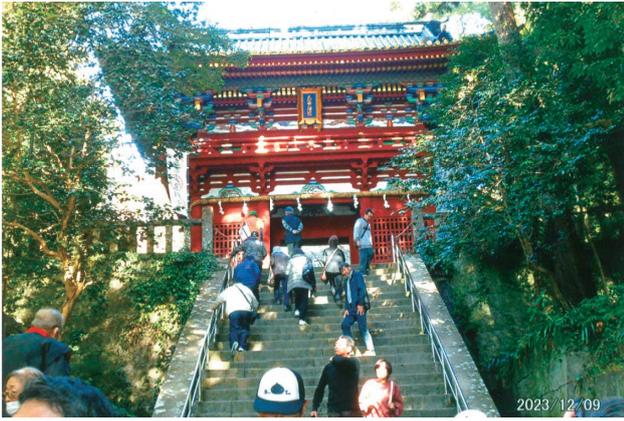
久能山と家康の関係を掘り下げて見た。

家康は武田の久能城を攻めて、駿河を武田から取り戻した。信長は甲州攻めを終えて、安土に帰る途中、久能山に立寄っている。家康もそのまま久能城を重要拠点とし、平地にあった駿府城に何かあった時、高い山の上にあった久能城に籠もることを考えたようだ。

特に有名なのは、1607年(慶長12年)12月の火災で駿府城は焼失、焼けた金銀を久能城に運ばせた。焼けた金銀はまた吹き直せば元に戻る。久能山埋蔵金伝説はこの辺りから始まったようである。家康は久能山に自分を埋葬するよう遺言を残したという。400年以上前に運んだ家康埋蔵金が今でもどこかに残っているかもしれないと言われている。

家康についてもう少々記して見る

家康は晩年駿府城で過ごした、1616年(元和2年)家臣たちに次のような遺言を残し、75年の生涯を閉じた。「遺骸は久能山に埋葬し、江戸の増上寺で葬儀を行い、三河の大樹寺に位牌を納め、一周忌を過ぎたら下野の日光山しもつけに堂を建てて勧請せよかんじょう(勧請=神仏の霊を分けて、別の所に移して祀ること)、関八州



この階段を登ると見事な樓門となる。国宝



樓門の説明カンバン、樓門入門横にあった

の鎮守になろう」

死後・遺骸はただちに久能山にうつされ、翌年、久能山東照宮の社殿が造営された。大工の棟梁は駿府城の造営や、二条城二の丸御殿、日光東照宮拜殿などの造営にも関わった前にも記したが「中井正清」、当時の最高の建築技術が結集した権現造の様式で、日光東照宮をはじめとする全国の東照宮の原型とる。

久能山は静岡市にある有度山の南側の一部で標高216メートル、背後の日本平は海底から隆起してできた丘陵地であり、長い年月をかけた浸食により久能山が独立峰となった。

久能山には飛鳥時代、観音菩薩を祀る「久能寺」が創建された。寺は大いに隆盛し、行基や最澄なども訪れたという。室町時代には今川氏が久能寺を崇敬、地形的に天然の要害であることから、駿河に侵入した武田信玄は久能寺を近くに移し、久能山上に砦を設け、久能城と呼んだ、のちに武田氏が滅び、駿河が徳川氏の領地となったことから久能城も徳川氏のものとなった。

「家康公は眺望絶佳な久能山をこよなく愛し、自分の住んでいる駿府城の本丸と久能城を同じく思うほどに気にいられていたようだ」。

こうして遺言のとおり家康は久能山に埋葬され、東照宮が造営された。家康の死去にあたっては、神号を「大明神」とするか「大権現」とするかで家康に仕えた崇伝と天海の間で論争があったという史話がある。前者は日本の神道の独自性を主張する吉田神道、後者は神仏習合の教理に基づく山王一実神道。実際には二代将軍秀忠や幕閣が熟慮し、朝廷の勅許を得た上で「東照大権現」の神号を贈られることになったという。

江戸時代を通じて全国に約六百社の東照宮が建てられあるというが、久能山東照宮は現存する最古の東照宮である。彩色、彫刻、金工、石造物など質の高い建築・工芸技術が高く評価されている。幕府の権威を示す豪壮な雰囲気の日光東照宮に比べ、久能山東照宮は家康公の祭祀施設として温和な表情と小ぶりだが内容は綿密で極彩である。家康公は世界でも類を見ない、260年にわたる平和国家を築かれた。平和への思いは建造物の様々な彫刻にも込められていると姫岡宮司は話す。

幼い頃から家康を育んだ駿府・家康の生涯について

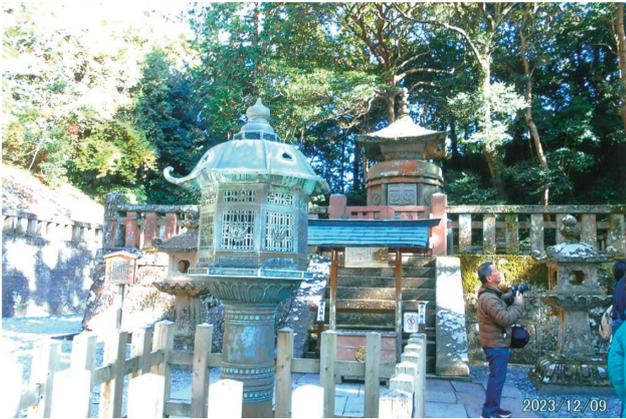
静岡県は旧国名で伊豆・駿河・遠江ととおみで構成される。現在の静岡駅周辺の市街地は駿河の中心都市で律令時代に駿河国の国府が置かれたことから「駿府」と呼ばれていた。



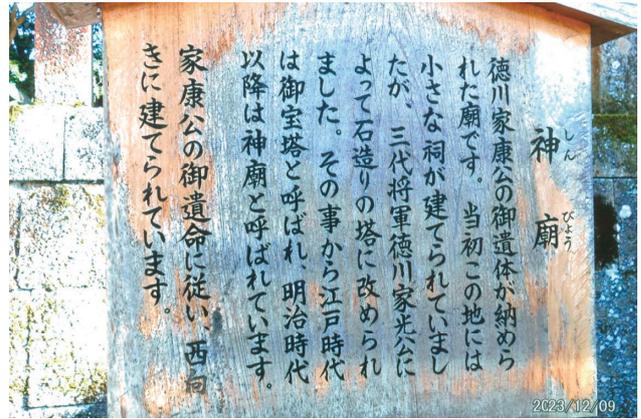
拝殿の入口、天井の彫刻は見事という外はない。国宝。



本殿、拝殿より続く、見事であった



徳川家康公の神廟、この奥の石廟の中の、地下深く、「土葬」にて納められている



「神廟」の立カンバン、東照宮一番奥にこの神廟はある。豪華絢爛な社殿とうらはらに地味だが重圧感がただよう

駿府は東西の両文化圏の接点に位置し、幹線道路である東海道と太平洋に面する交通の要衝にあたることから、古来、武士たちの領土争奪の舞台となってきた。戦国時代に入ると駿河守護職の今川氏によってほぼ制圧され、今川義元の時代には駿河・遠江・三河の三カ国が勢力下に入り、今川氏は最大版図を築いた。

今川氏の館は発掘調査によって駿府城の範囲内にあったと推定されている。出土品や京都から駿府に移り住んだ貴族たちの日記などから、今川館では茶の湯、和歌や連歌、けまりの会が催され、京都さながらの優美な生活が送られていたこともわかったようだ。また清水寺、愛宕山、八幡山など京都にちなんだ寺や山の名もつけていたことから今川氏は京都に模したまちづくりを進めていたようである。

家康は生涯で三度、駿府で暮らしている。八歳から十九歳まで駿府で過ごした時は、今川氏の人質として不遇な少年時代を送ったともいわれているが、松平家の保護・存続させるために幼い竹千代を手元に置き、今川氏の重臣として育てるためのエリート教育を施したと考えられているようだ。

家康は義元の軍師として活躍していた僧・雪斎から薫陶を受けた。長じて家康は学問好きの武将となり、多くの書籍を収集しているがこれも駿府で過した幼少期の影響が大きかったと考えられるようである。

元服も婚姻も、駿府で行われている。

十九歳になった家康は桶狭間の戦いで今川義元が討死し、生まれ故郷の岡崎に戻った。そして独立への一歩を踏み出した。

まず西三河の平定に着手し、今川義元の嫡男・氏真とは断交、1562年(永禄5年)には織田信長と同盟を結び、東三河に進んで三河統一を果たす。

1568年(永禄11年)、武田信玄が駿河に侵攻し、今川氏真は掛川城へと逃れた。家康は信玄と手を組み遠江へ侵攻。氏真を攻撃し、和議により掛川城を開城させ戦国大名としての今川氏は滅亡する。家康は浜松城を本城とした。

信玄が遠江を奪い取ろうとする動きを示したため不信感を抱いていた家康は、信玄と断交する。信玄は家康の領国である遠江・三河にも侵攻し、武田・徳川両軍は三方ヶ原の戦いに、家康は大敗して浜松城へ逃げ帰った。

1573年(天正元年)に信玄が病死し、1582年(天正10年)に織田信長が武田氏を滅ぼすと、これに応じて家康は浜松城を出て駿府に入る。家康は武田攻めの論功行賞により駿河一国を与えられ三河・遠江・駿河の三国をも領有することになった。

同年、本能寺の変により信長が死去すると信濃・甲斐の領有をめぐる北条氏と争い、やがて両軍の和議が成立、こうして天正十年末に家康は甲斐と南信濃を手中にし、五カ国を領有した。

幾度もの戦いののちに勝ち取った駿河。家康は1585年(天正13年)から駿府城の築城を始め、1588年(天正16年)には天守を完成させた。東海道筋にあって交通の便が良く駿府は便利な場所であった。

だが翌年、小田原の北条氏を滅亡させた秀吉は、家康を関東に国替えし、駿府城は豊臣系の家臣・中村一氏が城主となった。国替え当時、家康は49歳、次に駿府を居城と定めるのは1607年(慶長12年)、65歳の大御所時代のことであった。

2023年(令和5年)NHK大河ドラマも最終編の12月になったが、家康公が愛したまち静岡へこの探訪となる。さすがにメディアの反応は大きく、「どうする家康・静岡・大河ドラマ館」は連日満員のようで大盛況であった。周辺の関係する観光地も同様にNHK様々である。

家康が埋葬された場所に立つ「神廟」(墓)他の13棟が豪華絢爛な桃山様式の社殿、7年をかけて、蘇った東照宮の中であって、地味ではあるが重味のあるこの「神廟」、圧倒される雰囲気であった。

遺命により、生誕地である岡崎や豊臣氏の拠点であった大阪を望む西向きに建てられているという「神廟」。人物が大河ドラマと重なって、人柄がしのばれるが、太とめの銅像には大差がありすぎる。

参考資料

久能山東照宮社務所発行書
静岡市歴史博物館 監修本



NHK大河ドラマ演じる「家康」の45歳頃の笑顔、演じる俳優「松本 潤」



NHK大河ドラマで演じる「家康」75歳の時、10日間で体重を5kg下げて演じたという
役者「松本 潤」令和5年12月17日大河ドラマ最終日の顔